

時代を駆ける：岡部健／7 みんなで「岡部村」作り

◇TAKESHI OKABE

《在宅のがん患者をみていて、草むしりや土いじりが好きな高齢者は生き生きとしている人が多いと気づいた》

介護施設を回ると、入所者は長年培った経験があるのに、お遊戯ばかりしているように感じました。農業って自然を相手に作業工程も多く、頭を使うんです。高齢者には農作業を楽しめる人が結構いて、場を提供できたらと思っていました。

《05年、仙台市郊外の秋保温泉近くに「岡部村」をつくった。敷地は5000坪(約1・65ヘクタール)と、サッカーグラウンドの2・3倍の広さ。看板もある。研究者から飲み友達、患者や家族も気軽に訪れる》

飲み屋で「DASH村」(日本テレビ系の番組で企画された新しい村)をつくりたいね、という話で盛り上がりました。自然の中で、昔ながらの生活を楽しむ。新車1台分で買える土地が偶然見つかりました。やぶの中で不法投棄の場でしたが、耕作放棄地らしく土地は平らで井戸水もあった。

知人の大工に小屋を作ってもらおうと、スタッフの家族らがデッキや露天風呂、発電機をつけてくれた。私は何もしていないのに立派なピザ窯までできました。テレビもなく集中でき、論文の締め切りが迫るとパソコン持参でこもったり。

《岡部村で毎年、患者会のイベントが開かれ、焼きたてのピザがふるまわれる》

「鳥の鳴き声が聞きたい」という車いすの男性患者を連れて行ったら、大好評。好きな短歌を情感たっぷりに詠んでいました。患者や家族が出入りするようになり、桜の季節には「最期に花見ができてよかった」と喜んでくれます。畑では遺族が野菜を栽培し、「土いじりをしていると心が落ち着く」そうです。夏は蛍が見られるし、カモシカやキジも現れます。

場所があると、そこにいる人たちが自然と助け合うんです。遺族が「イノシシに芋を食われた」と言えば、周りの人が「じゃあ、柵でも作るか」って。人と人がつながりコミュニティーができる。ボランティアなんて言わなくても、互いを気遣う。震災の避難所で助け合いが生まれるのも、同じなんだと思います。

=====

聞き手・下桐実雅子 写真・丸山博／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇おかべ・たけし

栃木県小山市生まれ。日本ホスピス緩和ケア協会理事。61歳(写真は5月、仙台市の「岡部村」花見会で患者と話す岡部さん<右>)

毎日新聞 2011年6月1日 東京朝刊